

信濃丸

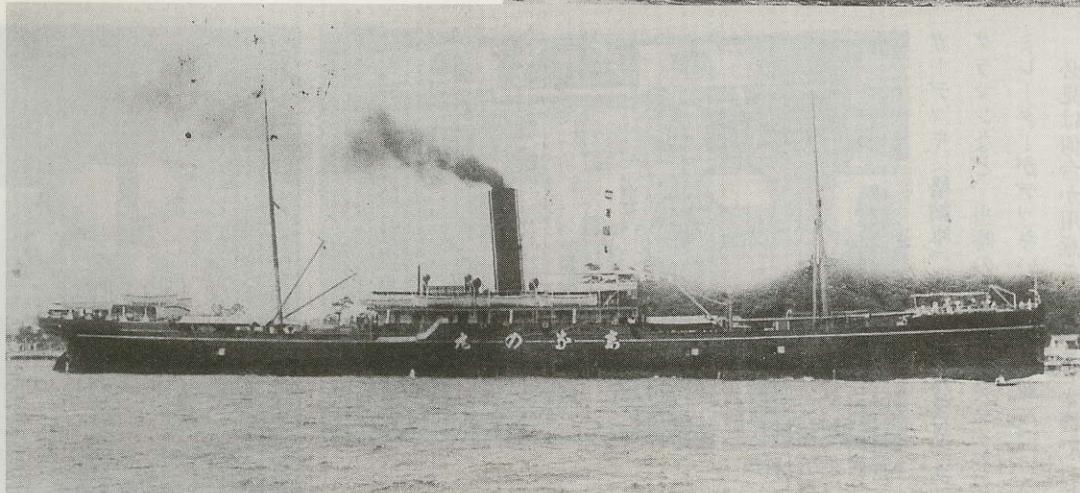
《主要目》貨客船、日本郵船所属、6,388総トン、6,740重量トン、主機三連成汽機2基、出力4,000馬力、最高速力15.4ノット、旅客定員1等26名、2等20名、3等192名、1900年英國D & Wヘンダーソン社建造

「敵艦見ゆ」を発信した 超有名船の素顔



(上) 山高五郎氏描く敵艦隊発見のシーン
(下) 台湾航路時代の信濃丸

(写真提供=小林義秀氏)



転送打電された「敵艦見ゆ」

日露戦争の勝利を決めた日本海海戦の初日。

その日の早朝、五島列島の西方を哨戒していた仮装巡洋艦「信濃丸」(しなのまる)は、北上するロシアのバルチック艦隊を発見、敵が対馬東水道を目指していることを打電し、戦勝のきっかけをつくった。年配者だった誰しも思い浮かべる感動シーンである。

ところが、この「信濃丸」の第一報が、韓国南部の鎮海湾で待機していた旗艦「三笠」に直接届かなかつたという史実は、案外知られていないようだ。「信濃丸」の無線電信機のパワー不足が、その原因だった。だからと言って、同船の発した警報の価値が下がるというわけでは決してないが。

有名な「敵艦見ゆ」の無電は、僚艦がこれを傍受し転送したものらしい。軍令部の『明治三十七八年海戦史』には、巡洋艦「笠置」を旗艦とする第三戦隊がこの警報をキャッチし、根拠地に転送したという報告がある。

また、『同海戦史』の別の箇所では、対馬にいた巡洋艦「厳島」が「信濃丸」の無電を「三笠」に送信したとしている。こちらのほうは距離からみて、僚艦からの転送電を「厳島」がさらに中継したものと思われる。

三菱長崎で建造される予定だつた

「信濃丸」は、日本郵船のシアトル航路定期船である。だが、多くの史書は同船を欧州航路の定期船としている。じつは筆者の著書にも、欧州航路船としたものがある。

同船はもともと、欧州航路の新造船十二隻の一隻として計画されたのである。十隻は英國に、二隻は三菱長崎造船所に発注され、長崎分の第一船は「常陸丸」、第二船は「信濃丸」になるはずだった。ところが實際には、「信濃丸」は英國で誕生している。

「常陸丸」の建造遅延が計画を狂わせたのである。ロイズ船級協会の長崎駐在検査員から、リベット工事について度が過ぎる干渉を受け、同船の竣工は大幅に遅れた。そして第二船の納期遅延も必至になつたため、郵船は「信濃丸」を英國に発注替えしたのだ。

こうした経緯で「信濃丸」は完成したが、歐州航路に就航したのはわずか一航海。竣工翌年の一九〇一（明治三十四）年からは、ずっとシアトル航路に張り付いている。

この航路は、国の特定航路助成金の交付を受けており、その条件に六十総トン以上、最高速力十五ノット以上という項目があつたことから、「信濃丸」が転用されたのである。それにも、同じ海域を走るカナディアン・パ

シフィックの優秀船に対抗するためにも、郵船は新造船を投入する必要があつた。

荷風が体験した「信濃丸」の航海

シアトル航路は洋上航海が長かつた。横浜を出帆して次港のビクトリアまで約二週間。海また海の毎日である。おまけに北太平洋は揺れるし、現代のクルーズ船とちがつて客室の居住性は悪く、エンターテイメントも少なかつたので、つらい航海だつた。

— 何処（いすこ）にしても陸を見る事の出来ない航海は、殆ど堪へ難い程無聊（ぶりよう）に苦しめられるものであるが、横浜から亞米利加の新開地シアトルの港へ通ふ航海、これもその一つであらう。 —

永井荷風の『あめりか物語』の第一篇「船房夜話」の冒頭部分である。

荷風は日露戦争の前年、「信濃丸」で米国へ渡つてゐる。「船房夜話」は、このときの航海をもとに書かれたものだ。荷風の米国行きをすすめたのは父の永井久一郎。当時、久一郎は郵船の横浜支店長をつとめていた。

神戸～基隆航路に転じる

明治末年、「信濃丸」は神戸～基隆航路に転じた。ほぼ同時に、大阪商船の「笠戸丸」も同じ航路に就航した。その二年前に第一回ブ

ラジル移民船になつた有名船である。
「笠戸丸」の前身は、ロシアの海軍病院船「カザン」。日露戦争の敵同士が、戦後も商業航路のライバルになつたわけだ。

そして大正末年、「信濃丸」は近海郵船の創立とともに新会社に移り、昭和の初めまでこの航路に就いていた。シアトル航路で有名な「信濃丸」であるが、じつは台湾航路時代のほうが長かつたのである。

「信濃丸」の船歴はまだまだ続く。

その後は北洋に転じ、日魯漁業グループの鮭工船に大変身。シーランオフには貨物船として稼働した。同じころ、「笠戸丸」も北洋の蟹工船になつてゐる。

なんとも縁の深い両船だが、「笠戸丸」が太平洋戦争で沈んだのに対し、「信濃丸」は戦後も働いてゐる。最初は青函航路。終戦で旅客が激増したうえ、空襲で青函連絡船が壊滅したため緊急動員された。

次いで、外地からの復員輸送に従事した。大岡昇平の名作『浮城記』（ふりよき）の主人公をフィリピンのレイテ島まで迎えにきたのも、この「信濃丸」である。

日魯漁業から解体業者に売却されたのは、サンフランシスコ和平条約が調印された一九五一（昭和二十六）年。波乱にとんだ稼働生涯は実に五十一年に及んだ。山田
廻生